

県中教研 保健体育部会だより

第 40 号

発行日 令和7年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 辻 聡
題 字 金山 泰仁 先生

12年間の学びを意識した授業づくり

主任指導主事 豊田 真一

体育・保健体育科では、生徒が生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するために、発達の段階のまとまりを踏まえ、指導内容が体系化されています。

また、幼稚園や小学校、中学校、高等学校の接続を重視し、系統性を踏まえた指導内容の一層の充実を図ることとされています。例えば、幼稚園教育要領では「幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて、進んで体を動かそうとする意欲を育てることが大切である。」と明記されており、それを受けて小学校学習指導要領の解説では「各種の運動遊びにおいて児童の発達の段階を踏まえて、ねらいとする動きを遊びの要素を取り入れて行う。」と明記されています。

中学校1・2年生においては小学校と、中学校3年生においては高等学校との円滑な連結を視野に入れながら指導に当たることが大切です。

体育分野だけではなく、保健分野においても、系統性を理解し、指導・支援に当たることが大切です。小学校では、身の回りで起きていることについて、生活経験を基により実践的に考えます。中学校では、自他の生活について、根拠を基により科学的に考えます。高等学校では、個人だけではなく、社会的な取組対策を基により総合的に考えます。

これらのことから、私たち保健体育科教師は、生徒が「運動が好きだ。もっとうまくなりたい。また運動したい。」と思えるように、12年間の学びを意識した授業づくりに取り組みなければなりません。異校種間で情報交換しながら、生徒が夢中になって取り組める授業をつくっていきましょう。

(東部教育事務所)

「楽しくない」けど「楽しい」

部長 辻 聡

令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査報告書の中学生のデータでは、保健体育の授業が「楽しくない」「あまり楽しくない」と回答した生徒が男子で8.6%、女子で16.2%います。この生徒が「保健体育の授業で楽しいと感じるとき」の質問に回答しており、半数以上の生徒が「楽しい」「やや楽しい」と感じている場面が2つあります。1つは「できなかったことができるようになったとき」。もう1つは「友達と交流したり、協力できたとき」です。これは、男女共通です。

「できなかったことができるようになったとき」の値は、生徒が感じる保健体育科の授業の楽しさや、男女の性差に関わらず、高い数値となっています。これは、生徒が「できるようになりたい」という思いの表れです。私たちは、生徒の現状を理解し、どうやったら生徒が有能感を高めることができるかの工夫（指導の個別化）について、さらに研究を深めていく必要があります。

また、「友達と交流したり、協力できたとき」も男女共通で高い値です。これは、仲間とのコミュニケーションを通して、生徒が運動意欲を高めたり、協力して課題に取り組んだことで喜びを味わったりしたと捉えることができます。コミュニケーション能力や意欲、協力等は、テストの点数と違い「値」で表すことが難しい力です。ただ、「楽しい保健体育科の授業に必要な力」と生徒が回答しています。生徒の豊かなスポーツライフの実現に向け、内面的なスキル（非認知能力）の育成について、さらに研究を深めていく必要があります。

「できないことはAIがやってくれる」、「コミュニケーションはAIが代わりにしてくれる」というときが目の前に迫っています。このようなときですが「できるようになりたい」、「友達と関わりたい」という生徒の思いに頭を悩ますことは無意味ではないはずです。生徒が今後、変化の激しい時代を生き抜いていくために、私たちは、AIには代われない大事な力を育てているという自覚と誇りをもって、次年度以降も研究の歩みを進めていきましょう。

(富・速星中)

第68回 研究大会の取組

新 川 地 区

(下・朝日中)

2年 球技「バスケットボール」

指導者 濱田 将平

「チームの特徴を生かし、相手コートの空間を攻める戦術を工夫しよう」を学習課題に、2学年のバスケットボールの授業が提案された。朝日中学校では、全ての分野で「男女共習」を徹底しており、バスケットボールのような球技においても、男女一緒にプレイする姿がみられ、日々積み重ねてきた学習環境づくりが生かされていた。また、FormsとExcelを活用した学習カードで班員の考えを共有して閲覧できるようにしたり、ゲーム中の動画を電子黒板で再生して全員で確認できるようにしたりとICTを積極的に活用していた。これらにより、「空間を攻める」という共通課題に対し、

班や個人の課題解決に向けて、協働しながら自分たちのペースで学習を進めていた。活動中には、生成AIを用いて課題の解決方法を探る班もあり、AIが提案した課題に対しての答えを、自分たちで取捨選択して練習に取り組む姿がみられた。生成AIの提案が議論を深めるための選択肢となっており、話し合いをより活性化させ深い学びにつながっていた。



部会協議では、各種目におけるICTの活用方法について実践例を共有するなど、積極的な意見交換が行われた。

永原みどり指導主事（東部教育事務所）からは、「ICTの効果は、他者の意見を自分の端末を通して学ぶことができること、ICTを通して自分が認められることにある。」「今後は、自分が見たいときに確認したい動きを見られるようになっていくとよい。そうすると自分の実態に合ったものになり、自己調整に役立つ。」等の助言をいただいた。

中野 梨華（黒・清明中）

富 山 地 区

(富・大沢野中)

1年 球技「バドミントン」

指導者 中田 雄也

「オーバーヘッドストロークの動きを高めるため、自己や仲間の考えたことを他者に伝えよう」を学習課題として、1年生のバドミントンの授業が提案された。授業の序盤では、オーバーヘッドストロークのポイントが動画を使って紹介され、生徒は、自分の課題を確認した。体育館には、課題克服のための練習場所（方法）が5か所準備され、「ポイント」や「つまずき事例」等の説明が分かりやすく提示されていた。生徒は、自分の課題に応じた練習を選択し、タブレット端末で撮影した動画を見ながら仲間と話し合ったり、考えたことを付箋に記入したりして、意見を伝え合った。練習場所付近に付箋を貼るホワイトボードを設置したことで、ペアになった人だけでなく、その練習方法を選択した他の仲間とも意見を共有することができた。



豊田真一主任指導主事（東部教育事務所）からは、生徒が主体的に学ぼうとする気持ちを伸ばしつつ、教員が指導するタイミングや内容を調整する必要があることや、学校段階の接続や発達の段階のまとまりを考慮した指導の重要性について助言をいただいた。

佐藤豊教授（桐蔭横浜大学：授業力向上アドバイザー）からは、「豊かなスポーツライフの実現に向けた共生の視点を踏まえた授業づくり」と題した講演で、「する、みる、支える、知る」など体育には多様な楽しみ方があることや「共生」の視点をもった授業展開や指導の工夫等を、具体例を交えながらご教授いただいた。

高瀬 優子（富・芝園中）

第68回 研究大会の取組

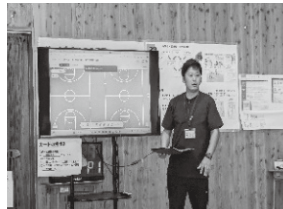
高岡地区

(射・新湊南部中)

1年 球技「バスケットボール」

指導者 篠井章太郎

「チームの課題に応じた練習内容を選択し、活動しよう」を学習課題として、1年生のバスケットボールの授業が提案された。Benesseが提供している学習支援ソフト「オクリンクプラス」を活用し、授業の振り返りを行うことで、個人やチームの課題を的確に把握することに繋がり、より適切な指導を行うことが可能となっていた。また、生徒が取り組みたい練習内容の集計も行うことができ、練習場所の設定に有益な効果がみられた。チームや個人の実態から課題を選ぶことができるように選択肢が用意されており、それぞれの課題に応じた解決の見通しが立てられるような動画資料が準備されていた。生徒は動画を確認して課題解決のために必要な動きの確認を行うことができた。



中村吉男主任指導主事(西部教育事務所)からは、「個別最適な学びと協働的な学びを実現させるために話し合い活動が増えることもあるが、単元を通して活動量を確保しつつ、それぞれの学びの時間を保障することが重要である。また、『どうすればパスをもらえるのか』『なぜパスが通らないのか』について考えさせることで、チームの課題に合った練習方法を選択できるようにするなど、実際の自分たちの姿を振り返りながら解決への見通しをもたせることが重要である」とご助言いただいた。また、生徒自らが仲間とともに課題を解決する学習経験を積み重ねていくことで、体育が楽しい、大好きと感じる生徒を育ててほしいと締めくくられた。

宮腰 太輔(射・新湊中)

砺波地区

(南・平中)

3年 球技「アルティメット」

指導者 大島 康生

「チームで連携して防御を突破するための空間の活用の仕方を身に付けよう」を学習課題に授業が提案された。

空間の活用の仕方について、前時の試合映像から動き方を考えさせ、具体的な動き方を図示したことは、生徒が本時に取り組むことを具体的にしてから活動に取り組むこと



につながった。空間を作りだすなどの動きが身に付くように、攻撃側にとって数的に優位なアウトナンバーゲームを行った。生徒はゲームの前後に、作戦ボードを使ってチームの動き方を示したり確認したりして、空間を活用した具体的な動き方を考えていた。ICT機器の活用やゲームのルール等の工夫が、学習課題の解決に迫るための有効な手立てであった。

部会協議では、生徒の活動の様子を基に話し合い、ゴール型球技における「ボールを持たないときの動き」を習得させるための手立てやICT機器の活用方法について、活発に意見交換を行った。長谷川和也指導主事(西部教育事務所)からは、「導入において前時の様子を取り上げることで、生徒の課題意識や主体性を高めていくこと」「映像の活用や動き方の図示、作戦ボードの活用等のように技能の基となる知識を得ることと、練習やゲーム等を通してできることを往還させる授業づくりが大切なこと」等の指導をいただいた。

授業力向上アドバイザーの佐藤豊教授(桐蔭横浜大学)には、「豊かなスポーツライフの実現に向けた共生の視点を踏まえた授業づくり」と題した講義をしていただいた。これからの保健体育の授業の在り方や、豊かなスポーツライフの実現について、海外の授業の様子や、共生の視点をもった授業の実践例を基にご指導いただいた。

大西 将也(砺・出町中)

研 修 報 告

報告者 富山大学教育学部附属中学校
教諭 鶴飼 雅信

令和6年11月14日（木）～11月15日（金）、第63回全国学校体育研究大会山口大会が開催された。本年度は、大会主題を「健康の保持増進と豊かなスポーツライフを実現する体育・保健体育学習～子供たちが自ら進んで課題解決に向かう姿を目指して～」として、全体会と分科会が実施された。

全体会では、テーマを「誰一人取り残されず、全ての子供の可能性を引き出す共生の視点に立った体育・保健体育における学習指導の工夫」とし、コーディネーターに早稲田大学吉永武史准教授を招いて、シンポジウムが行われた。県中教研保健体育部会の研究の視点にも「共生の視点に基づく授業づくり」が位置付けられており、我々の取組との関連があると感じ、興味深く聞かせていただいた。

シンポジウムの概要

上記のテーマとし、幼・小・中・高・支・大の校種から1名ずつをパネリストとしてシンポジウムが行われた。

まず各パネリストから、それぞれの校種での共生の視点に立った学習事例をもとに報告があった後、コーディネーターとのディスカッションで、保健体育における共生について意見交換がなされた。今回のテーマは学習指導の工夫だったので、指導の工夫についての意見が多く挙げられ、以下の内容にまとめられると捉えている。

- ① 人・もの・場・ルール

① 人・もの・場・ルール

人 様々な立場にたって運動やスポーツに関わることができるような工夫。「する・見る・支える・知る」の視点をもち、体育理論との関連をもたせる。

もの 目的や参加者に応じて、より安全で、扱いやすい道具の変更や開発。

場 生徒がやってみたくと思うような場の設定や公式の規格にこだわりすぎず、目的に合った広さに変更するなど、柔軟性をもつ。

ルール 多くの生徒が、運動やスポーツの本質的な面白さに触れられるように、ルールを生徒と考えたり、変更を加えたりする。

- ② 学校現場や保健体育の授業においても、多様な個性を発揮し（発揮するための工夫がなされ）、個性が認められるDEI（Diversity「多様性」、Equity「公平性」とInclusion「包括性」）の視点に立つことが必要になる。

コーディネーターの吉永先生からは、総括として、保健体育の授業の中では、これまでも共生につながる場面は多々あった。しかし、これからは、それを意図的に生み出し、共生について考えたり、指導したりすることができるようにしていくことが必要であるという趣旨のお話があった。シンポジウムは、司会者より各パネリストへ「共生とは」という質問で締めくくられた。

- 幼：誰もがやってみたくと思える環境を整えること。
- 小：子供が安心して活動できること。ありのままでよいと思えること。
- 中：一緒に体育ができてうれしいと思い、それを共感できること。
- 高：共生の意義を理解させていくこと。
- 支：積極的な社会参加につながる活動を行うこと。
- 大：それぞれの個性を知る機会
DEI（Diversity, Equity & Inclusion）の視点をもてるようにすること。

これらの報告・提案及び議論を踏まえ、様々な検討が必要な課題をいただいたと感じている。

私自身の反省になるが、共生への捉え方の狭さに気付かされた。例えば、障害のある生徒について考えた時、身体的な障害ばかりをイメージしていた自分に気付く。しかし、障害は身体的なものだけではない。私には、精神的な障害や発達障害のある生徒の視点に立った授業づくりの視点が乏しい。また、これからますます外国につながりをもつ生徒も増えてくることが予想される。日本語でのコミュニケーションに不安を覚える生徒への手立てについても、自分自身の実践に引き出しが少ないと感じた。

きっと、私と同じように、共生の視点をもった授業を、どのようにつくっていけばよいのか不安に感じる先生方も多いのではないだろうか。また、反対に、すでに目の前の生徒のことを考えて、共生の視点に立った授業に挑戦しておられる先生方もいるはずである。

県中教研保健体育部会では、研究推進計画の研究項目に「ICTの活用」と「共生の視点に基づく授業づくり」を挙げている。共生については、ここで書かせていただいたことも十分に参考にしていきたい。また、「ICTの活用」も「共生の視点に基づく授業づくり」と切り離して考えず、関連付けて捉えることで、研究により広がりや深みが生まれるのではないかと考える。

教師が共生の視点をもち、生徒一人一人を見つめ、運動やスポーツの面白さに触れることができる授業のためには、授業に対する考え方の転換と、より効果的で具体的な手立ての検証が必要である。そのために県中教研保健体育部会がある。一人の力ではできないことも、この中教研という場で、仲間の先生方とならできるはずである。それぞれの実践をもち寄り、生徒の姿から授業を検証する。これもまた、共生の一つの姿ではないだろうか。